

第17講

論説・評論(3)―具体例

要旨整理

傍線部の意味内容を把握して、それに該当する身近な例を答えさせるのが具体例を問う設問である。その設問形式には次のようなものがある。

- ・傍線部「……」とあるが、その具体例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
- ・傍線部「……」とあるが、その例として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① この種の設問で問われる箇所は、傍線部が抽象的・一般的な表現であることが多い。まずは傍線部の具体的な内容を前後の文脈をもとに把握する。
 - ② 傍線部に指示語が含まれている場合は、その指示内容を特定する。
 - ③ 傍線部の意味内容を把握できたら、そのポイントとなる事柄をおさえる。また傍線部の前後に具体例があげられている場合は、その内容を確認する。
 - ④ 各選択肢を読み、それぞれの要点をつかむ。そして傍線部のポイントとの異同を吟味する。明らかに不適当な選択肢をはずして絞り込む。
- 適当な具体例を選択させる（または、不適当な具体例を選択させる）設問は、センター試験では伝統的によく出題される設問形式である。抽象的な傍線部の内容を把握しているかを、身近な具体例を通して試そうという出題意図をうかがうことができる。

演習問題 A

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

私どものまわりにあるものが確かにそこに**在る**ということ、それが仮現でなくて実在するものだということは何に由来するの**か**。

こうした疑問が平常の私どもに発生することは**ま**ずない。私の前を走っている車や、そこからくる人が、幻でなくて実在する車であり人であることはあまりに**あ**たりまえなことである。**し**かしなぜそれが本当に「**在る**」とわかるのかとあらためて設問されたら、答えは容易でない。思弁的な解釈は避けて、まず身近な実例から入ってゆこう。

映画館でドラマ映画を見ているときの経験を思い起こすことにすると、映画館に入るときには、ひまつぶしのためとか鑑賞のためとかあるけれども、筋が進むにつれて、私どもは映画の場面――つまり人物や状況にひきずりこまれ、は

5

POINT

読解のポイント

- (1) 具体例を導き出す際には、抽象的な言い回し↓具体的な言い回し↓身近な具体例という手順を念頭におく。
- (2) 傍線部の内容にふさわしい具体例を自分なりに考えたうえで、選択肢にあたるという方法もある。
- (3) 身近な具体例を考えながら評論文を読むことをふだんから習慣化しておく、この手の設問に強くなることができる。

重要語句

◇仮現①見かけの現象。仮象。②神仏が仮にこの世に姿を現すこと。

◇思弁的⇨経験によらず、頭の中で理性的に考えるさま。

らはらしたり、笑ったり、主人公が助かってくれればと念じたり、こんな悪人は退治されてしまえと思ったりする。スリルの場面にであうと、「これは映画なのだ、本当のことじゃないのだ」と自分に何遍も言い置きかせて落ちつきをとりもどそうとするけれども、ものの十秒もたてば心の余裕は消えてしまつて、映画の状況とまた一緒になつてはらはらす。すなわち「これは本当ではなくて仮現なのだ」ではなくなつて、「仮現なのに実物なのだ」となる。

ではなぜ実在の感じになるのかといへば、それは見る私が演じられていることがらに「関与」するからである。つまり私はもう「見る私」ではなくなり、傍観者の立場にはいなくなつて、映画の状況とともにいるわけである。そしてすべて「ともにいる」とときには、私の相手はすでに何ほどか実在性を得ているのである。

映画の場合、見る私が先方に関与せず、冷やかな態度をゆるがさずにすわっているとしたら、——すなわち先方と私との間に心理的距離をたもつて、しらじらと眺めていたならば、それは人の姿が幕の上に映っているにすぎない。肩を怒らせたり、笑顔をつくったり、口をばくばくさせたりしている姿が見えるだけであり、すべては仮現で非実在である。映画の場合だけでなく、本当に自分の前にある光景——人々が往来し、家並みが左右にひろがっている実在の街の光景でさえも、見る自分が凝然として心をうごかさずに眺めていれば、街は私から遠のき、ハイパンになつてしまい、本物というしつかりした根が消えて宙に浮いたように見え、写真を見ているのと似た見えていただけのものに変わつてしまうものである。

認識の眼が勝つて心の冷やかな人からすれば、映画で泣いたり喜んだりするのはまことにおろかな仕草であるが、逆にいえば、何を相手にしてもそれに関与して「ともにいる」ならば、相手を仮の姿から実在のものにまで固めることができることになる。一枚の子供の写真は、その子にかかわりのない他人から見れば、風景や記録写真にくらべて面白味の欠けた人物写真にすぎないけれども、その子を亡くした母親からすれば、子供はその姿のなかで当時の生存を今もたもっているのである。実物が本当にそこになければそれは仮象でしかないという見方は、自然科学的な認識か、さもなければ鈍物の見方でしかない。

同種のことからで次のような際立った例がある。テレビで陸上競技の八百メートルのレースを見ていた人がこういう経験をした。——真夏の日のことで、この人はうちわを使いながら観戦していたのであるが、テレビの画面の上にも入道雲がわいて、見るからに暑そうだった。直線コースに入つて選手たちのせり合いが一段とはげしくなり、緊張が高まったとき、先頭を走る選手の顔が大写しででた。見ている自分のすぐ正面で、汗にまみれてクトウしている若者に向かつて、「そろそろ少しだ、頑張れ」、そう心で掛け声しながら、ふと気がつくとき彼のうちわはテレビの画面をあおいでいた。

これは少しも滑稽なことがらではない。自分に向かつて最後の努力をしほっている若者の苦しみを前にして、傍観的な観戦者ではなくなつたからこそ、若者は画面から踏みだして実在となり、彼の前に立つたのであった。うちわであおいでやつたのは自然のキケツであつた。

相手に向かつて自分が近づく態度、ともにいる態度をとつて、行動的に接近するときは、このように先方に実在性があたえられるのであるが、もう一方でこれと反対の態度をおして実在性が生まれる行き方がある。それは自分の行動

◇関与＝あることに関係すること。

◇凝然＝じつとして動かずにいるさま。

5 に対して先方が邪魔をして抵抗となる場合である。この場合の方が前のよりも理解しやすいのであるが、私が歩いてゆくその前に障害物が在ってそこに突きあたれば、それはそこに確かに在るものだということとはあたりまえのことである。そこに在ると思ったものが、手をだしてみたら何の手こたえもなければ、それは幻影で非實在である。

40 こういうように自分に対して抵抗となるものは、かならずしも感覚的に触れてわかるものと限ったことではない。むしろ末梢感覚でわかるということとは二義的で、それよりもっと中心的に、私という主体に対して抵抗をあたえるものが實在感をもつのである。事実、「手で触れたものは、触れたとわかります。」しかし触れたものが確かにそこに在るのだということ、それが私にはわかりません」という實在感喪失の現象があることから理解できるとおり、ものに實在性をあたえるのは末梢の器官で感覚した抵抗感覚ではなくて、私の生きた行動に対して向こうからあたえた抵抗にかかのである。したがって、私が憎む者、私が戦う相手——こうしたものも實在性をそなえている。私が行動をとおして肯定する愛の相手が實在性をもつと並んで、行動をとおして否定する憎しみの対象も實在性をもっている。信心ぶかい人にとっては、神が實在するのとともに、悪魔も確かに在るのである。

45 行動する私に対して向こう側から阻むものが實在者なのだという考えは、デイルタイにはじまり、* シューラー、* ニコライ・ハルトマンらによつてすすめられたもので、生活を展開し拡大しようとする生命的なショウドウが自分の外のものに突きあたり、阻まれることによって自分の限界を知らされるわけであるが、自分を阻むこの抵抗をとおして、片方では自分、反対の側では対象世界という相反するものがそれぞれ實在することが認知される。

50 人かすですでに知ったように、私に向かつて敵対し邪魔するものが自分にとって實在するものだという考えは、ことがらの半面を教えるものであつて、もう一方私のまわりで私を支え、私を助けてくれるものも同じく實在するのだということ忘れてはならない。デイルタイ自身が、「母は子供にとつて最初の実在である」と述べているのであるが、母は子に対する抵抗ではなくて、もつとも近いもの、支持するものである。* それでボルノウは、自分を阻み狭める外のものが實在感をもつと考えるより前に、自分をのばし支えるものが實在として受けとられるのだと考える必要ならぬと唱えている。

55 このように私どもが能動的なはたらきかけをとおして先方とかかり合えるときに、はじめて先方に實在性があたえられるわけであるから、* アウシュヴィッツの収容所で生活のように外界とカクゼツされていると、「(中略・囚人は鉄条網の外の正常な世界が存在しなくなったかのような感覚をもつようになる、ということが述べられている。)」。

60 こうした生のままの行動の世界から實在性というものを取り除くときに、二次的に認識の世界が誕生する。まわりのものや人から自分をしりぞかせ、距離をおいて、澄んだ知恵の眼で心をうごかさずに見つめるならば、そこに認識の世界が展開する。理論(テオリア)ということはギリシャ語で「見つめる」という意味であるが、認識するためにはまわりのものに「はたらきかける」ことをやめて、離れたところから見なければならぬ。

(注) デイルタイ……ドイツの哲学者(一八三三—一九一一)。

シューラー……ドイツの哲学者(一八七四—一九二八)。

(島崎敏樹「心で見る世界」による)

◇二義的＝根本的でないさま。それほど重要でないさま。

【参考】一義的＝意味が一つだけであるさま。最も根本的なさま。

多義的＝いくつもの意味があるさま。

ニコライ・ハルトマン：ドイツの哲学者（一八八二—一九五〇）。
 ボルノウ：ドイツの哲学者（一九〇三—一九九二）。
 アウシュヴィッツの収容所：第二次世界大戦中、ナチス・ドイツがポーランド南部に建設した強制収容所をさす。捕虜やユダヤ人などが収容され、強制労働や毒ガスなどにより多くの人々が犠牲になった。

問一 — 線 a ~ e の漢字と同じ漢字を含むものを次の各群の ア から 一つ ずつ選び、記号で答えよ。

a ヘイ バン ア 話題のサイ バンを傍聴する。 イ カン バンに偽りがある。 ウ ゲン テイ バンの写真集を買う。 エ 合唱のバン ソウをする。 オ 選挙のジ バンを固める。	b ク トウ ア 現実からト ウヒする。 イ ト ウ ロンが白熱する。 ウ 対戦相手をア ット ウする。 エ ザ ット ウにもまれる。 オ ト ウ シをむき出しにする。
c キ ケツ ア 会社のナイ キを定める。 イ 勝利のカン キに酔う。 ウ キ ピンな動作で対応する。 エ キ タクの時間を連絡する。 オ 提出のキ ゲンを守る。	d シ ョウ ドウ ア シ ョウ ジュンを合わせる。 イ 内政にカン シ ョウ ウする。 ウ 他人をチュ ウ シ ョウ ウする。 エ シ ョウ ウ ゲキを与える。 オ シ ョウ ウ テンがばやける。
e カ ク ゼツ ア 優れたサイ カクを発揮する。 イ カ ク チ ョウ 高い文章を読む。 ウ カン カクを置いて並べる。 エ 舞台裏でカ ク サクする。 オ 野鳥のホ カクを禁止する。	

問二 — 線① 仮現 なにに実物 なのだ とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の ア から 一つ 選び、記号で答えよ。

ア 映画と現実とは本来別次元のものであるのに、場面に熱中するあまり客観的視点を失うことで二つの世界が混同され、両者をあたかも同一のものであるかのように思い込んでしまうこと。

イ 映画の登場人物に自分自身を投影させていくと、主人公と鑑賞する自分の位置が逆転し、架空の世界とは自覚していても、次第に現実そのものとして意識されるようになっていくこと。

解説

◇ジバン＝活動のための足場や勢力範囲。

◇ナイキ＝団体の内部でのみ通用する決まり。

◇カクサク＝はかりごとをめぐらすこと。

△傍線部の内容説明を求める設問。第一～三段落の内容を把握する。「仮現」は、第二段落の「幻」と同意であり、第三段落では映画の場面が例としてあげられている。

◇架空＝事実に基づかず、想像によって

ウ 映画は本来実在しない虚構の映像の世界であり、登場人物は虚像にすぎないが、その中に引き込まれたり自己を投入したりすることによって、実在するものとして認知されるようになること。

エ 非実在の幻影としての映像の世界に、心理的距離を縮めながら自己を没入させていくと、おのずから人間や社会の実体が浮かび上がり、現実を正しく認識できるようになること。

オ どんなに心をうごかしながら対象を見ている、その一方でどこかに冷静な傍観者の立場をたもっているのが、現実と架空の世界との境界が的確にとらえられること。

問三

「線③」この人、b「見ている自分」、c「彼」という表現の使い分けの説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「この人」は筆者にとって身近な関係にあることを示していて、「見ている自分」は筆者が親近感を感じなくなつたような言い方であり、「彼」は筆者が少し嫌悪感をもった表現となっている。

イ 「この人」はこの経験をした人物を特定する働きをしていて、「見ている自分」は筆者がこの人物に視点を重ね合わせているような表現であり、「彼」はその人物を客観的に見た言い方である。

ウ 「この人」は読者に対する紹介の意図で使用していて、「見ている自分」はこの人物がテレビの中の出来事と一体化している様子を表しており、「彼」は「この人」との重複を避けるために言いかえている。

エ 「この人」は筆者が共感も反感も表明していない表し方であって、「見ている自分」は読者にこの人物への共感を促すような言い方となっており、「彼」は筆者がこの人物に共感していることを表している。

オ 「この人」はこの出来事に関する人物であることを漠然と指している、「見ている自分」はこの経験そのものに密着した人物として表しており、「彼」は「見ている自分」を言いかえた表現である。

問四

「線②」認識するためにはまわりのものに『はたらきかける』ことをやめて、離れたところから見なければならぬ」とはどのような態度か。本文中の例に即した説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分に敵対してくる相手や自分を支えてくれる相手との物理的・心理的距離を縮めることで、それらの相手を明確にとらえようとする態度。

イ 映画をひまつぶしとして見たり、人物写真を風景や記念写真と同じように面白味の欠けたものとしてとらえたりするような、冷やかな態度。

ウ 映画の虚構の映像に対して心理的な距離をたもって眺めたり、街の光景に対して感情を移入せずに観察したりして、それらを客観的に把握するような態度。

エ テレビの画面に映る陸上競技の選手に向かってうわわであおいだりするような行動はとらずに、心の中で声援を送りながらじつと画面に見入るような態度。

つくること。

△表現の特徴を尋ねている設問。aの「この」は指示語である。bは「自分」という表現に注意する。cも指示語。bとcの違い、すなわち、観戦者に対する筆者の距離の取り方の違いに着目する。

△具体例に沿って説明させる問題。「『はたらきかける』ことをやめ」ということの具体例を、映画やテレビの例から把握する。選択肢を吟味する際は、「認識」という語にも注意する。

オ 映画の映像は現実ではなく虚構であるとして、目に映る街の光景やテレビの実況中継などの現実が存在しているものと区別するような態度。

問五

筆者はこの文章で、実在性や実在感が生じる仕組みについて述べている。本文の内容に合致しているものを次のア～オから二つ選び、記号で答えよ。

ア 実在性とは、対象が本来的にもっているものではなく、自分が能動的な働きをとおして対象とかかわり合うときに、はじめて対象にあたえられる主観的な認知である。

イ 対象の実在性は末梢器官の知覚する抵抗感覚によって保証されるものであり、実物が本当にそこになれば、自然科学的な認識からすると、それは幻影で非実在にすぎない。

ウ 実在性とは、結局のところ、相手に阻まれることによって認識される自分の限界とその反対側の対象世界という、相反する実在の認知という形でしか獲得され得ない。

エ 相手に実在感を感じるのは、自分が相手に向かって行動的に接近する場合や、相手が自分という主体に抵抗をあたえたり、自分を支えてくれたりする場合などである。

オ 実在感とは、それが本当に「在る」と思う感覚であるが、それはかならずしも実在と同義ではなく、実在そのものを認知するにはむしろ実在性を取り除いた認識が必要とされる。

問六

この文章の論述の進め方の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 読者の経験に直結する日常的な事例を複数提示して具体的な理解を導いたうえで、問題点を抽象化し、最終的に一般化した結論に到達させようとしている。

イ 哲学的な問題を読者の周辺の事例と結びつけて平易にかみ砕いておいて、その問題をめぐる議論を日常的なレベルで多角的に理解させようとしている。

ウ 冒頭で提起した問題について、平易な事例では説明することが難しいことを示したうえで、抽象的な議論へと転換し、哲学的な問題として把握させようとしている。

エ 読者の身近にある事例の考察をとおして冒頭の問題の論理的な説明方法を示し、哲学者たちの抽象的な議論の理解に応用させるように意図している。

オ 提起された問題について、身近な事例の具体的な検討から始めて、さまざまな視点による哲学的な考察を積み重ねることで、総合的な理解へ導こうとしている。

△本文の内容との合致を問う設問。本文全体をいくつかの大きなまとまりに区切り、それぞれの内容を把握する。そして各選択肢の内容の適否を、本文の該当箇所と照らし合わせて判断する。

△本文の構成を問う設問。最初に提起された問題がどのように説明されていくのか、その論述の進め方を把握する。特に、具体例が有効にはたらいっている点に着目しよう。

◇多角的＝いろいろな角度や方面にわたっているさま。